

「祓(はらえ)」の贖物(あがもの) ～「アハラヤ」に関連して～

メモ:鉄本(2022.06.03)

「住吉祭礼図屏風」などに見る夏越祓(なごしのはらえ)、別名六月祓(みなづきばらえ)には、炎暑の季節による疫病を祓うことと、季節の変わり目に対する祓えの備えという二つの意識が存在している。

「物忌(ものいみ)」が「穢気(えげ)」から隔離する消極的行為であるのに対して、「祓」は、「穢気」を直接除去しようとする積極的意図がある。

「祓」の最も普及した型である「禊ぎ」は水の浄化力によって災厄を払うことに意義がある。「祓」の時に用いる贖物(あがもの)には、様々な形代(かたしろ)がある。

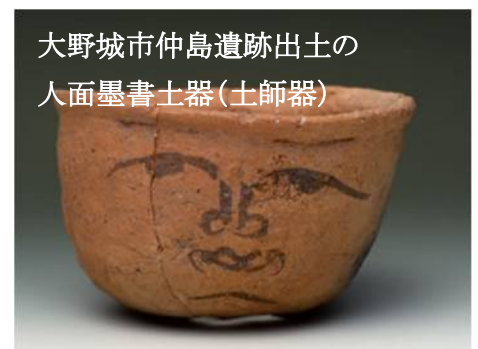
1. 贖物としてのヒト

- ① 持衰(じさい):「魏志倭人伝」に記述がある。中国に使者を派遣する際に、一人の人物を持衰という立場に置き、旅の間、使者の身代わりとなって「物忌(ものいみ)」(髪を梳く、沐浴、肉食、着替えをすべて禁止する)の生活を送る。
- ② 兆人(かたひと):祓いの行事に参加し祭儀に奉仕する。
兆人そのものに穢れを付けて祓う人という意味もある。
- ③ 贖児(あがちこ):贖物を持参し処理する巫女。後世には藁や紙の人形(ヒトガタ)に代る。
- ④ **アハラヤ(阿波羅耶)**:住吉祭礼の夏越祓に見える童。童は祓いの人形を入れた櫃の前を歩き、祓人形の象徴(カタヒト)となる。



2. 贖物としてのモノ

- ① 天児(あまかつ):天間勝、贖児とも記す。疫病を移す形代(依代)としての人形の一種。「流し雛」の風習にも見ることができる。
布製のものは、這子(ほうこ)と呼ぶ。
- ② 人面墨書土器:人面を土器に描くことで、その人の形代としての意味を持つ。息を土器の中に吹き込むことにより、穢れを祓う。
- ③ ヒトガタ(人形):紙の人形に穢れを託し川などに流すことにより、身を清める。人形代。
- ④ オシラサマ:家、農耕、養蚕の守り神。
東北地方の風習。木や竹の棒に布を着せて振り動かす(=オシラアソバセ)。
同族的繋がり年長女性やいたこ(巫女)が祭る。
「おしらかみ」、「おしらぼとけ」と呼ぶ地方もある。
【余談】「オシラサマ」は、アニメ「千と千尋の神隠し」にも登場。



【参考文献】

「日本民俗文化大系4 神と仏」の第2章「女性司祭の伝統」上井義久 小学館 1994
「広辞苑」、「日本大百科全書」